

## ネストロイの喜劇『鬼のいぬ間に』

—— 翻訳上の諸問題

長谷川 淳 基

Zu J. Nestroys Posse „Einen Jux will er sich machen“  
—— von den Übersetzungsproblemen

Junki HASEGAWA

### 1. 始めに

筆者はすでに日本独文学会・1991年秋期研究発表会でのシンポジウムにおいて、本論文で扱うテーマについて報告している。すなわち、オーストリアはウィーンのピーダーマイアーの時代の民衆劇作家を代表するヨーハン・ネストロイ。このネストロイの作品のうち、最も成功をおさめた<sup>1)</sup>笑劇『鬼のいぬ間に』"Einen Jux will er sich machen"を翻訳するに際しての問題点を報告したものがそれである<sup>2)</sup>。先ずはこの報告の内容を順を追って紹介した後、この「報告」以後筆者が知りえた関連の研究のうちで最も興味深い、シャイヒルの研究を手がかりに議論をより広く展開し、もう少し一般的な問題について考えてみたい。

### 2. 翻訳の試み

#### 2-1 シンポジウム

上記シンポジウムでの発表に際し印刷に附された資料から紹介しよう。

『研究発表要旨』に載せる原稿の提出を求められ時期は、当然のことながら「発表」に先立つ数カ月前のことであった。そこにはこう記した。

#### 翻訳上の諸問題

1) 「方言」——あるいは言語のレベルについて。

番頭さんは古典がお好き？標準語は気取った言葉、標準語は説明語。

社会的身分と方言——「旦那さん」の方言と「丁稚どん」の方言は違う。

「丁稚どん」も一人のときは標準語。

ウィーン方言は名古屋弁？

2) 語呂合わせ——あるいは限らない接近への努力。

原文の2回の洒落は、翻訳では3回掛けて笑わせる。

Scholzを意識した語呂合わせにはお手上げ？

努力の後は諦める！

- 3) sprechender Name——あるいは Herr Geist は、ミスター才気？  
もったいないけど、訳さない。
- 4) その他の問題——あるいはまとめ。  
タイトルはどう訳す？  
以上のような問題について例を挙げて検討し、翻訳について考えたい。

さてシンポジウムは終了し、それから数カ月を経て、今度はシンポジウム報告の原稿を書くよう求められ、それへは以下のように書いた。

#### 翻訳上の諸問題

ネストロイの "Jux" の翻訳を試みるにさいし、特に留意すべきであろう点を二点挙げて説明した。第一点は、言葉のレベルを訳し分けること、第二点は、登場人物のうち阿呆な道化役のメルヒオールに名古屋弁を話させたことについてである。

言葉のレベルの訳し分けについては、もう一方の道化、つまり賢い道化で主人公のヴァインベルルの話しぶりの多様さを、実例を挙げて検討した。ヴァインベルルは気分や場面に応じて、古典劇の主人公、学校の先生の説教調、日頃親しんでいるちまたの方言、等々の言葉を操る。登場人物の社会的身分、職業、出自、その他の性格づけをそれぞれの人物のことば使いにより、つまりは言葉のレベルによって表現しているネストロイにあってみれば、これを訳す場合に相応する文体、調子が必要であろう。

阿呆な道化メルヒオールは、めいボケ役 W. ショルツを想定して書かれた役柄である。劇中でのメルヒオールの語り口は、一見したところウィーン民衆劇の伝統的な道化とつながる特徴を持っているが、それらせりふに込められた意味内容を観察するとき、両者ははっきりと区別される。メルヒオールのおかしみを表現するための試みとして、名古屋弁を用いたゆえんである<sup>3)</sup>。

シンポジウムでの報告時間は一人あたり25分ほどであり、私の報告は翻訳の具体例を示し、これを根拠に短く結論を述べるにとどまった。以下、手元に残っている、当日の発表用資料として配布した紙片を元に、私の主張を説明しよう。

#### 2-2 ヴァインベルル、あるいは大出世した男と言葉のレベル

ヴァインベルルは小さな町の食料雑貨品店の店員であり、お店の旦那の結婚を機に、長年の功績でいよいよ番頭に昇格できる望みが出て来る。ところが思いもかけず、なんと店の共同経営者に指名されるのである。このヴァインベルルの話す言葉を詳細に見ることにしよう。

○ヴァインベルルの言葉、その1：賢い道化による商業界への両面的視野、あるいは掛け言葉と造語

場面はヴァインベルルが初めて舞台上に登場して、風刺小唄、すなわちクプレーを歌い終わったあと、つづけて同時代の世相診断を一くさり披露する場面である。

-Schauen wir au'm Handelsstand, diese vielen Galanterie-Handlungen, und schau'n wir auf d' Menschheit, wie handeln s' da oft ohne alle Galanterie, wie wird namentlich der zarte, gefühlvolle, auf Galanterie Anspruch machende Theil, von dem gebildetseynsollenden, spornbegabten, cigarrosuzelnden, roßstreichelnden, jagdhundcagliolierenden Theil so ganz ohne Galanterie behandelt! (1-10)<sup>4)</sup>

「商売の世界には、エレガントなブティック数々あれど、かたや人間界には、エレガントにほど遠いブツテクれたくなる様な行為が多々あります。例えば、か弱く、感じ安い、本来エレガントに接すべき御夫人方が、教養あるはずの、乗馬の才豊かな、葉巻をちゅうちゅうやったり、馬のたてがみを撫でたり、獵犬の機嫌をとったりする紳士方に、ちっともエレガントに扱われておりません。」

食料雑貨店で働くヴァインベルは、みずから奉じる「商売の世界」Handelsstand、これは例えばウィーンの数多くのエレガントなブティック Galanterie-Handlungen に端的に象徴されるものであるが、この商売の世界と、そして人間界 Menschheit とを比較し、人間界のエレガントさの不足を嘆くのである。人々は、紳士たちですら、エレガントにはほど遠い振舞いをする handeln。か弱い御夫人方ですら決してエレガントには扱ってもらえない behandelt。こうして Handel-, -Handlung(en), handeln, behandelt と巧みに語呂合わせがなされているこの文の、もう一つの文体上の特徴は、名人芸的な早口の話芸を前提にした造語である。引用文の終わりの部分の5個の分詞形容詞がそれである。

引用文を含むこのくだり全体は次のような文で締めくくられる。「要するに商売の世界は高尚なものでございまして、わたしども、商売をやっています者は、高いところに立っております。ただその高さゆえに目くらめいて、商売の高みよりころげ落ち、倒産するものが後をたたないってわけです。」

商業界に生きる人間も万全とは行かない、と笑わせるヴァインベルは作者であるネストロイ自身によって演じられた役どころである。巧みな語呂合わせ、台詞まわしの名人技、そこに込められた痛烈な風刺。これらは賢い道化ヴァインベルの役どころである。

○ヴァインベルの言葉、その2：民衆の活写、あるいは下町のウィーン方言

場面は変わって、上役としてのヴァインベルがクリストフェルに店を切盛りする心構えを説いているところ。客が来ないとき、とヴァインベル、「そんなときは気楽だわな」。だが、しかし…

[...] aber plötzlich tritt neues Leben ins Merkantilische, in 5 Minuten steht's ganze G'wölb' voll Leut', da will eins Anderthalb Loth Kaffee, da eins um 2 Groschen Gabri, der ein' frischen Aal, die ein' g'faulten Lemoni, da kommt ein zartes Wesen um ein' Bernzucker, da ein Kuchelbär um ein Rosenöhl, [...] (1-11)

「ある日突然商売が活況を呈する。とたちまち店は一杯。こちらでは誰かが、コーヒー25グラム、あちらではケイパー2グロッシェンぶんどさーい。こっちの男が生きのいい鰻

なら、あっちの女は腐りかけのレモン。きゃしゃな女が熊の胃みたいな色の飴を買いにくれば、おさんどんのお熊が薔薇油を買いにくる。…」

ここでのヴァインベルルはウィーンの下町言葉を話している。ツァングラーの店で、忙しく客をさばいているときの様子を滑稽に誇張し、掛け言葉を使って面白おかしく語ってみせている場面である。この言葉は (e)s, G(e)wölb(e), Leut(e), der ein(e), die ein(e), g(e)faul-ten, ein(en) などの e または en の脱落と, Gabri, Lemoni, Bernzucker, Kuchelbär などのウィーンないしオーストリア特有の単語によって特徴付けられる。

ポピュラーなウィーン方言辞典を書いたことで知られるユリウス・ヤーコプの説明によると、ウィーン方言において「アクセントのない e は (特に語尾で) 辛うじて聞こえるだけで、綴りではたいして省略される」<sup>5)</sup>。Gabri, Lemoni は、同じくポピュラーなウィーン方言辞典であるヒューゲルの辞書<sup>6)</sup>などでも容易に分かるように、それぞれ標準語では Kaper, Zitrone である。オーストリアでは甘味料に使う植物のカンゾウを Bärenreck, 直訳すると「熊のふん」という。このカンゾウをつかった飴が Bernzucker である。Kuchelbär では Kuchel の縮小語尾のところウィーン方言の特徴が現れている。同じくヤーコプによると「縮小形は、普通の縮小は語尾 -l または -el を、著しい縮小には -erl と取る」<sup>7)</sup>。言うまでもなく我がヴァインベルルやクリストフェルルも「愛すべき」という意味での、この「著しい縮小語尾」を持っている。

○ヴァインベルルの言葉, その3 ブルク劇場への意識, あるいはひとクラス上のウィーン方言

ヴァインベルルは思いもかけず共同経営者に指名され、まさに天にも登るような心地。ところが不思議なことに「願い事ががたごと音をたてて動きだした」。

Wie schön wär' das, wenn ich einmahl als alter Handelsherr mit die andern alten Handelsherrn beym jungen Wein sitz', wenn so im traulichen Gespräch das Eis aufg'hackt wird vor dem Magazin der Erinnerung, wenn da die G'wölb'thür der Vorzeit wieder aufg'sperrt, und die Budl der Phantasie voll ang'raunt wird mit Waaren von ehmahls, wenn ich dann beym lebhaften Ausverkauf alter G'schichten sagen könnt', o ich war auch einmahl ein verfluchter Kerl, ein Teuxelsmensch ein Schwerack – ich muß – ich muß um jeden Preis dieses Verfluchterkerl Bewußtsein mir erringen. (1–13)

「ああ、いいだろうなあ。いつの日か年いて大店の旦那になった俺が、これまた年老いた大店の旦那たちと、今年産のワインを酌み交わす時、そんな気のおけない語らいに、思い出の倉庫の前に張った氷が割れ、大昔の店のドアのかんぬきが開いて、ファンタジーの売り台にいにしえの商品が山積みされる時、そんなとき昔話を威勢よくたたき売りながら、ああ、俺も昔は極道だった、すげえ奴だった、ワルだったといえたらなあ。— 俺は — 俺は是非この極道意識を自分のものになくちゃ。」

想像だにできなかったステータスが約束されたヴァインベルル。彼は突然何か特別のこ

と、善からぬ冒険をしたくなるのである。彼自身思わず知らず沸き起こってきたこの気持ち、クリストフェルに語って聞かせるのがこの場面である。

ここで先ず目につく言葉使いの特徴は、接続詞 wenn に導かれる副文の四度の繰り返しと、「…思い出の倉庫の前に張った氷」から、「昔話を叩き売りながら…」までのくだりの、メタファーを用いた修辞法である。詠嘆調の、いかにも大げさなここでの台詞は、何よりもゲーテ、シラーに代表されるドイツ古典演劇の文体上の特徴を真似たものである。しかし一つひとつの比喩に使われるイメージは、悲劇の英雄のそれではなく、市井のしがない店員である。

皇帝庇護のもと、夜な夜な古典演劇を上演しているブルク劇場の雰囲気は、映画『ブルク劇場』に描かれている通りのものである。これは、シューベルトを主人公にした『未完成交響楽』の監督として知られるヴィリィ・フォルストが1937年に制作した作品で、戦前に日本で公開された欧米の映画の中でも特に人気を博した。それは、ブルク劇場での芝居のシーンで始まる。舞台では、今まさに名優ミッテラーがファウストを演じている。

Was sucht ihr mächtig und gelind,  
Ihr Himmelstöne, mich am Staube?  
Klingt dort umher, wo weiche Menschen sind.  
Die Botschaft hör ich wohl, allein mir fehlt der Glaube;  
Das Wunder ist des Glaubens liebstes Kind.  
Zu jenen Sphären wag ich nicht zu streben,  
Woher die holde Nachricht tönt;  
Und doch, an diesen Klang von Jugend auf gewöhnt,  
Ruft er auch jetzt zurück mich in das Leben.

---

---

Die Träne quillt, die Erde hat mich wieder! (Z.762 ff.)

「天井の声たちよ、なぜきみらそのように力強く、また柔和に、  
この塵あくたのなかにおれに話しかけるのか。  
心のやさしい、感じやすい人たちのいるほうへひびけばいいに。  
なるほどその福音のことはおれにも聞こえる。しかしおれには信仰というものがない。  
奇跡は信仰の愛子<sup>マコ</sup>なのだ。  
あのいつくしみ深いおとずれを送ってくる  
あの世界へはいろうと、おれは努めぬ。  
ではありながら、この歌のひびきは幼いときから聞き慣れているので、  
今もおれを生へ呼びもどす。

---

---

涙があふれる。大地はおれを取りもどしたのだ。」(762行以下) (手塚富雄訳)

映画史に深く刻まれているこの映画について、ここで特に取り立てて言うことはない。ただ、ミッター役を演じている名優ヴェルナー・クラウスの、ここに引用したような最高レベルのドイツ語にだけでなく、同じく映画の冒頭のシーン、舞台前方のプロンプターに入っている小太りの男ゼードルマイアーのローカル色の付いた言葉にも耳をすませてもらえば、筆者が本論で述べることの多くは理解していただけたも同じである。一場面だけ紹介しよう。美しく、可憐な少女に初めて出会ったミッターが、ゼードルマイアーにその印象を伝える場面である。

Mitterer: Mein Himmel! Dieses Kind ist schön! Eine Heilige!

Sedlmayer: Hm, ja – Heilige – 's find' i an bißl übertrieb'n, nit wahr? Aber 's is a sehr nettes, liebes Madl. Aber einigermaß'n. S is d' Tochter vom Schneider in Nußdorf.

ミッター： ああ何という！ 美しい子だ！ 聖女よ！

ゼードルマイアー：ふーん、そう、聖女ねー。ちっとばかおおげさじゃネエーかねー？ まあ親切でかわいい子だけんどね。でも、すごくてほどじゃー。ヌスドルフの仕立屋の娘でさー。

このゼードルマイアーを演じるは喜劇俳優としてしられるハンス・モーザーである<sup>8)</sup>。モーザーについては後でもう一度触れる機会がある。

我らがヴァインベルルに戻ろう。ヴァインベルルのここでの台詞が我々観客にどんなに滑稽に聞こえようとも、そのことで、この台詞の持つ真実性は些かでも損なわれるものではない。ヴァインベルルは小説も読む、ただしそのジャンルは偶然手に入ったものに限られるのだが<sup>9)</sup>。したがって文語調もなんでもないし、教養と言ったものも身につけているかもしれない。人生の一大転機にあって、彼はここで、ほぼ確実に自らを待ち受けることに相成った薔薇色の生活に想いを馳せるのだが、それはまた同時に、今の今まで自分が送ったであろう、あるいは送らざるをえなかった本来の自分の生活を意識すること、あるいは再認識することでもあった。ここでのヴァインベルルの気の利いた、それでいて滑稽な台詞は、彼の驚きと、そして憤怒の表現である。これまで自ら望んでは、そのつど絶望的にまで叶えられることのなかった人生、別の人生、夢の生活が、自分の意志ではなく、他人の意志によって実現することを知った人間の驚きと怒りの言葉である。

文体はブルク劇場の古典演劇のそれに似てはいるが、やはり方言である。ヴァインベルル自身には「演じる」意識は些かもなく真情のみを吐露しているのであるから、この台詞は絶対にウィーン方言で話される理由がある。しかしこのヴァインベルルは、ネストロイが自分のために用意し、演じた役柄でもあった。引用した台詞の後半のヴァインベルルの言葉、

o ich war auch einmahl ein verfluchter Kerl, ein Teuxelsmensch ein Schwerack

についてこの点をもう少し考えてみよう。

ヴァインベルルは真実、この言葉で決意し、これを行動に移すことで自らの過去を含め

た人生全体を救い上げ、回復しようというのである。注目すべきは同じ意味で三通りに繰り返される、それぞれの単語である。verfluchter Kerl は標準ドイツ語、Teuxelsmensch はこの語の標準ドイツ語形が Teufelsmensch であることから標準語に近い方言と言ってよからう。そして Schwerack。芝居を見ている観客は、この最期の単語が発せられた瞬間に大笑いする。それはこの単語そのものがおかしいためではない。ちなみにこの単語を、上で名前をあげたウィーン方言辞典で引いて、それをまとめてみると、「悪漢。いたずら者。体力があって頭の切れる人。特に子供が好んで使う言葉」で、チェコ語を語源とするウィーン方言であることが分かる。

思いもかけぬ好運のために気分は高揚し、意識はすでに旦那衆の仲間入りをしているヴァインベルルは、言葉を飾ってその気持ちを披露している。その言葉は、店員から店の旦那へと身分を変えようとしている男のドイツ語、標準ドイツ語（あるいは書き言葉として知っているドイツ語）を操ることのできるウィーン人の言葉、あるいは何がしかの教養を備えたウィーン人といってよい。この場面において、先に述べたようなヴァインベルルの「驚きと怒り」が語られているとすれば、それは喜劇よりも悲劇に似つかわしい。崇高で激越な芝居は、ブルク劇場の専売である。このブルクへ、ウィーンの下町のいたずらっ子が迷い込み、それによって引き起こされる笑いこそが、この Schwerack のもたらす笑いである。

標準ドイツ語を、日頃馴染みのない言葉、よその言葉、と感じているウィーン人に、あるいは観客に、同じ意味の単語を、標準語、自分たちに近い感じの単語、自分が子供の時から使ってきた言葉というように、レベルを違えて投げかけるこの文例でも、ブルクの古典演劇世界に張り合う彼の喜劇の特徴を認めることができる。あるいは、標準ドイツで書かれた古典劇を上演しているブルク劇場へのこのような対抗意識は、ウィーン人としてのネストロイの自然と言うこともできよう。

### 2-3 メルヒオール、あるいは「傑作な下男でよー」

ツァングラーに雇われるや、すぐに町へ行くようを言いつけられたメルヒオールは、当然のことながら、番頭のヴァインベルルや丁稚のクリストフェルルを知らない。旦那に、犬のように<sup>10)</sup> 忠実なメルヒオールにたいし、その同じ旦那をいわば裏切って町へ繰り出してきたヴァインベルル、そしてクリストフェルル。

初演当時このメルヒオールを演じたのが、ネストロイの生涯の友人でもあったヴェンツェル・ショルツである。

ウィーンの人々から Daxel (ダックスちゃん) と呼ばれたショルツは、それまでのウィーンで知られていた道化とはまったく異なるタイプのおかしみを作り上げた。その笑いは、ウィーン民衆劇ゆかりの「郊外劇場」の一つであるレオポルトシュタット劇場で、当時人気を博していたパントマイム劇団の醸し出すおかしきとも、ハンスヴルスト、カスペルル、タデドゥルなど、ウィーンの隈雑な道化の活躍するブルレスク風の笑劇がもたらす笑いとも違っていった。ショルツは、「機械装置への様式化」も、「馬鹿げた子供っぽい仕草」も必要としなかった。ショルツは立っているだけでおかしく、おかしきそのものの根源現象であった、と伝えられている。<sup>11)</sup>

そのショルツの風貌は伝えられているスケッチのたぐいからも伺い知ることができる

が、その意味ではやはりここでも、先に名前をあげたハンス・モーザーを思いだしてもよからう。今年で没後30年になるモーザーの演じたショルツ役は、その評価の高さ故に、早くも「伝説の」と枕詞を付けて語られることも稀ではない。<sup>12)</sup>

当のショルツは1857年に70才で没した。亡くなるひと月前まで舞台に立っていた。その死はウィーンの人々に、国民的な不幸として悼まれた、と言う。

このショルツ演じたメルヒオールという言葉も含め、翻訳についてひとまず結論のみ述べておこう。

ショルツのウィーン方言は名古屋弁で訳し、そのおかしみ・滑稽さを際立たせた。そしてその他の人物の話すウィーン方言は、おおむね標準語で訳した。すでに述べたように、ウィーン人の、そしてネストロイには、ウィーン方言がドイツ語のヒエラルヒーの中で標準ドイツ語の下にランクされる言葉である、との意識はない。ウィーン方言、ないしはオーストリア方言が標準ドイツ語と対比して使われる場合には、例えば東京言葉と関西言葉との関係とかではなく、別の国語の要素もあるからである。そして標準ドイツ語は気取った調子の日本語で翻訳するというのが、シンポジウムで発表した翻訳の原則である。道化としてのショルツの強調、ウィーン人（ネストロイもそのひとり）のウィーン語に対する自負心、そして彼らの、書き言葉調の標準ドイツ語への密かな反発の気持ちを翻訳するための試みとしての結論である。

### 3. シャイヒルの説について、あるいはウィーン人だけのネストロイ？

2年ほど前になるが、1992年10月28日、ネオ・ゴシックの壮麗な建築物で知られるウィーン市役所のホールを会場に、「創造するネストロイから出版されるネストロイへ」のスローガンのもと、ネストロイに関する研究発表会がこの日の午前と午後に、そして夜に入ってさらに同じテーマでパネルディスカッションが催された。この折りにインスブルック大学のシャイヒル教授の発表した論文<sup>13)</sup>は、上で論じた問題点に照らして非常に興味深い。

シャイヒルの説に耳を傾けてみよう。論の冒頭、以下の文がネストロイの作品から引用される。

Von der Besoldung kann sich ein Bedienter nicht viel zurücklegen, sondern nur vom Betrug, vom Filouprofit, vom Schab und vom B'schores.

「お給金では、召使に何も残るものとしてごさいません。虚偽、ペテン、うそこき、指先のお仕事って手はありますが。」

引用された文はネストロイの笑劇『一階と二階』Zu ebener Erde und erster Stock II幕8場のシーン。召使のヨーハンは表向きは主人に忠義を尽くし、主人からも最も頼りにされているが、一皮むけば泥棒とでも言ってよいような男。このヨーハンが主人相手にしゃあしゃあと、自分の誠実さを語り聞かせている場面である。シャイヒルは「嘘による利得」を言い替えた4個の単語、Betrug, Filouprofit, Schab, B'schores に注目し、標準ドイツ

語から二つの方言を経て、盗賊仲間で使われる隠語までレベルの違う言葉での言い替えを指摘し、これをネストロイの文体の表現力の大きさを示すものだと、説明する。

グリルバルツァーの心の中に終生くすぶり続けた、標準ドイツ語への嫌悪感、その標準ドイツ語あるいはワイマール・ドイツ語の規範文体を、それでも一生涯追い求めざるをえなかった彼のジレンマ、などにも言及しながら、シャイヒルはさらにネストロイの笑劇である『分裂した男』Der Zerrissene を詳細に分析する。

主人公の大金持ちリップスは人生の全てに不満を抱き、何に対しても楽しみを見いだせないでいる。このリップスと金目当てに結婚しようとするシュライアー夫人、そして彼をいたわり、真心を捧げる娘カーティ。

KATHI: [...] Er heurath – ? Und wem will er denn heurathen?

MADAME SCHLEYER: [...] Mich! –

KATHI: [...] Ihnen – [...] (1–11)

カーティ: [...] あの方が結婚 —? で、どなたとご結婚なさろうとおっしゃって?

シュライアー夫人: [...] わたくしとザマス! —

カーティ: [...] あなたと — [...]

リップスはふとした気まぐれからシュライアー夫人に求婚する。そして彼女がこのことを誇らしげにカーティに告げる場面である。シャイヒルの言うところによると、ここでの方言と標準語の際だった対比は、そのまま二人の女性の人格の対比を表現する手段として使われている。4格目的語の代わりに好んで3格を使うウィーン方言 wem で素朴に質問するカーティ、そしてこれを見下し、正すような調子の4格 mich で答えるシュライアー夫人。そしてカーティは再び方言の3格で応じる。カーティの話す言葉は、一方でカーティの属する社会層をリアルに表現しつつ、もう一方では彼女の素朴で善良な性格を表すものである、とシャイヒルは言う。

#### 4. 結 び

教えられることの多いシャイヒルの発表は、これまでの決定版であったブルクナーとロンメル編集による15刊本の批判で終わっている。いわく、ことほど左様にネストロイにあっては、方言を含む様々のレベルのドイツ語が言わば作品そのものの価値となっているので、ネストロイのオリジナル表記を、どんなに子細なつづりでも現代語表記にはならない、とクレームを付ける。そしてネストロイの作品から「ザクセンの紳士(よそ者)にウィーン弁の冗談を、標準語で説明する」とクプレーの一節を引き、ウィーン語の単語について標準語のそれを指摘することのみでは、クプレーで歌われているのと同じ愚を犯すことになるかもしれない、つまりはウィーン方言に特有のシンタクスについて — ウィーン方言では4格目的語の代わりに3格を好んで使う等の —、もっと解説を付けるべきである、と現在刊行中の新全集版の編集方針に具体的な注文も出している。

これらの建設的な提言を、しかしながら、ネストロイの時代だけでなく今日も存在する

ウィーン人自身のウィーン弁に対する、したがって標準ドイツ語に対する、特別の意識、を繰り返し強調するシャイヒルの発表全体と結び付けるとき、あるいはシャイヒルの考えの中にも、よそ者に分からないネストロイ、という考えがあるのではとも想像したくなる。

想像はどうでもよい。シャイヒルはいい球を投げてきた。外国語への翻訳を直接に想定して展開された論ではないのだが、翻訳に際してさらに考え、解決しなければならない点に付いて、彼の意見は多くの示唆を与えてくれた。次は、また投げ返すことだけが肝要なのである。

方言を十二分に駆使した作家ネストロイのその言葉に関心を持つこと、それは筆者にとって、こんなキャッチボールを成立させることに他ならない。分からない世界があるから、あるいは、分からないと考えられる何かがあるから、分かりたいと思う気持ちが生まれる。異文化理解とはこのようなものでなろうか。

#### 注

- 1) ネストロイ存命中の上演回数から言うと、『ルンパーチヴァガブドゥス』259回、こちらは161回だが、『ルンパーチ』は9年先に作られている。
- 2) シンポジウムを機会に印刷・発表した翻訳『鬼のいぬ間に』は、「ウィーン民衆劇研究会」の共訳になるものであり、本論の「翻訳論」も「グループ」の20年間にも及ぶ共同研究の成果を踏まえたものである。
- 3) 「ドイツ文学」88号、日本独文学会編。245－6頁。
- 4) (1－10) は、1STER ACT-10te Scene を略記。以下同じ。引用に使用したテキストは Nestroy, Johann: Einen Jux will er sich machen. In: JN: Stücke 18/1. Hg. von W.E. Yates. Wien: Jugend und Volk 1991. なお同テキストが論旨の展開上不必要に煩雑だと思われた場合には、ロンメル15巻本とインゼル版の6巻本を適宜利用した。  
JN: Sämtliche Werke. Hg. von Fritz Brukner und Otto Rommel. 15 Bände. Wien: Schroll 1924–1930. JN: Komödien. Ausgabe in sechs Bänden. Hrsg. v. F.H. Mautner. Frankfurt am Main 1970.
- 5) Jakob, Julius: Wörterbuch des Wiener Dialektes. Nachdruck der Ausgabe von 1929. Harenberg Kommunikation, Dortmund 1980. S.5f.
- 6) Hügel, Fr. S.: Der Wiener Dialekt. 2. unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1873. Sändig Reprint, Wiesbaden Nendeln 1979.
- 7) Jakob: S.7.
- 8) この映画でのヴェルナー・クラウスとハンス・モーザーの二人について面白い報告がある。「映画『ブルク劇場』はモーザーの出演しているもので、世界的な成功を収めた中の一つである。アメリカでの批評は主役のヴェルナー・クラウスが芳しくなかった一方、リトル・カーネギー映画館での封切り後、ニューヨーク・タイムズは1927年10月27日付けの新聞で、『ハンス・モーザーは映画の中で、ただ一人心を和ませてくれる役者だった。彼一人が、現にあるがままのドナウ川を、より一層「青く」した』と書いた。」ニューヨーク・タイムズは、なかなかのウィーン通の批評家を抱えていたとも言えるが、1930年代には、ブルク劇場を語る場合に、ウィーン方言をも包括した劇空間としての理解を持つことが、とくに常識化していた。1923年にはブルク劇場がネストロイの作品をレパートリーに加えた。アメリカでの批評については Markus, Georg: Hans Moser. Der Nachlaß. Verl. C. J. Bucher, München und

Luzern, 1989. S.116. から引用した。

- 9) Wenn man nur aus uncompletten Makulaturbüchern etwas vom Weltleben weiß,[...](1-13)「世の中のことを知るには、不揃いのぞっき本だけが頼り、…」(ヴァインベルル)。この食料雑貨品店には、小説のたぐいも商品として扱われていたのかも知れない。
- 10) メルヒオールの、以前の勤務ぶりを記した証明書に、Treu, redlich, fleißig, willig, wachsam aufs Haus, [...] (1-6)「忠実、正直、勤勉、意欲あり、店の隅ずみまで気を配る、…」とある。これらの単語は犬を形容することのできる言葉である。
- 11) Rommel, Otto: Wenzel Scholz und seine Komik. In:JN: Sämtliche Werke. 15Bde. Ein Beitrag zur Geschichte der Wiener Volkskomik. Kraus Reprint. Band 15. S.159ff.
- 12) ハンス・モーザーは1934年にウィーンのヨーゼフシュタット劇場、1959年にミュンヘンのカンマー・シュピレー劇場で、またこの間の53年には映画でメルヒオールを演じ、その他の作品でもいわゆるショルツ役を数多く演じた。
- 13) Scheichl, Sigurd Paul: Hochdeutsch – Wienerisch – Nestroy. Das Potential der sprachlichen Situation in Wien. なお、シャイヒル教授から筆者におくられてきた手稿では、タイトルはHochdeutsch – Wienerisch – Nestroy. Nestroy und das sprachlichen Potenzial seines Wien. となっており、副題に変更があった。